

令和元年6月24日現在

機関番号：34602

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320194

研究課題名(和文) 近現代日本における出産・育児文化の民俗学・人類学的研究および望ましい将来像の提言

研究課題名(英文) Anthropological and folklore research of childbirth and child-rearing culture in modern and contemporary Japan with suggestion of its desirable future plans

研究代表者

安井 眞奈美 (Yasui, Manami)

天理大学・文学部・教授

研究者番号：40309513

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、近現代における出産・育児の変容を明らかにした上で、現代社会の抱える出産・育児に関する問題点を具体的に示すことにある。そして、安心して産み育てることのできる社会の実現にむけて、具体的な提言の素材を提供することを最終目的とした。

また研究成果の社会への還元を目指して、2013年10月に研究成果発表シンポジウム「出産の近現代を振り返り、未来へつなぐ」を天理大学にて開催し、各自が研究成果を発表、全員で総合討論を行って研究成果を共有し、今後の課題も提示することができた。その内容は、『出産の民俗学・文化人類学』と題して、2014年5月に勉誠出版より刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、近現代日本の出産・育児文化を明らかにするために、民俗学および文化人類学両方の立場からフィールドワークを実施し、研究会で検討を重ね、その成果を論文集『出産の民俗学・文化人類学』として刊行したことにある。章立ては「自宅出産から病院出産へ」「儀礼と異界」「子どもとの関わり」「出産の近現代を振り返り、未来へつなぐ」からなり、全体が見渡せるようにした。本研究の社会的意義は、日本の出産・育児文化の現状および歴史的経緯を明らかにしたこと、現代の出産・育児について討論を行い、産み育てやすい社会にむけての提言を論文集に含め、一般の人々に対してわかりやすく提示した点にある。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research project is to clarify the transformation of childbirth and childrearing in modern and contemporary Japan, and th point out proglems regarding childbirth and childrearing in today's society. The final aim was to provide concrete suggestions for making a society where all people can give birth and raise children with peace of mind.

We held an open symposium for the public entitled "Looking back to childbirth in modern Japan and connecting to the future" at Tenri University, in Nara, in October 2013. At the symposium, each researcher presented research results, and a discussion was conducted based on our results and suggesting remaining topics for research. Based on the result of the symposium, we published a book, "The Folklore and Anthropological Research of Childbirth" in May 2014, published by Bensei Shuppan.

研究分野：人文学

キーワード：出産 育児 水子 生命観 サポート・ネットワーク

1. 研究開始当初の背景

本研究のテーマである、出産および育児の文化変容に関する研究は、社会学、文化人類学、民俗学、女性史学、ジェンダー論、人口学、医学史など、様々な分野から進められてきた。とくに荻野美穂著『「家族計画」への道』(2008年)や岩田重則著『<いのち>をめぐる近代史』(2009年)など、中絶や避妊などの出生コントロールに関する研究も多数、蓄積されている。また海外の多くの研究者が、世界史上最速で少子高齢化社会に至った日本の政策に高い関心を示しており、研究も進展している(ティアナ・ノーグレン 2008 [2001]『中絶と避妊の政治学』)。さらに、猪飼周平著『病院の世紀の理論』(2010年)のような、近現代の医療環境を検証する研究が登場するようになった。その背景には、「医療崩壊」や「出産難民」などと称されるように、近年、産科医が減少し、出産できる医療施設が減少するという事態が生じているからである。

しかし、現状の問題点を踏まえた上での研究は、まだ始まったばかりである。それゆえ本研究は、まさに現状の把握という点から出発することとした。まず各研究者が各自の研究テーマに基づいてフィールドワークを行い、近年の出産・育児の問題点を把握することに努めた。そして、その成果を過去の流れの中で捉え、現状を改善するための方法を具体的に提示すべく、議論を重ねていくことにした。

2. 研究の目的

本研究は、近現代の出産・育児の変容を総合的に明らかにし、その上で現代社会の抱える出産・育児に関する問題点を示すこと、また、安心して産み育てられる社会の実現にむけて、具体的な提言の素材の提供を最終目的とした。

さらに、研究成果を一般社会へ還元するために、「研究成果」に示す通り、研究成果発表として科研最終年度の2013年にシンポジウムを開催し、その成果を基に、科研終了後には直ちに『出産の民俗学・文化人類学』を刊行することができた。

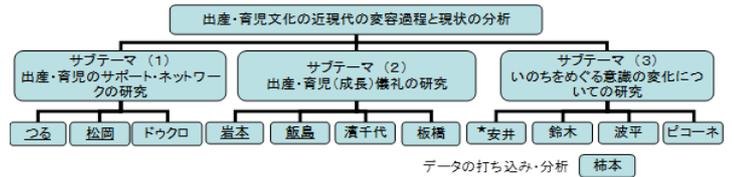
3. 研究の方法

本研究では、民俗学および文化人類学の独自性を活かして、以下のような3つのサブテーマを設けた。各研究者は3つのグループに分かれて重点的にフィールドワークを実施し、その経過において、皆で議論を重ねながら、総合的な理解を目指した。3つのサブテーマは以下の通りである。

(1) 出産・育児のサポート・ネットワークの研究

- (2) 出産・育児(成長)儀礼の研究
(3) いのちをめぐる意識の変化についての研究

である。この3つのサブテーマについて、以下のようにグループ分けをして取り組むこととした。



この研究の独自性は、出産・育児を支える人々を、妊産婦を取り囲むさまざまなネットワークの総体として分析すること、また文化人類学および民俗学が得意としてきた儀礼の研究や、「あの世」や「異界」を想定したコスモロジーの中で「いのち」を考えることにある。加えて、聞き書きを中心とした地域滞在型のフィールドワークによって、地域の内側から問題を捉え、より現状に即した成果を得たいと考えた。また、3つのサブテーマの研究成果を関連させることにより、より幅広い視野から出産・育児を捉えられるとみなした。つまり、出産・育児を現代社会の問題としてだけではなく、文化的な営みとして把握し、積極的に次世代の文化を創り上げる素材を提供していこうと考えたのである。また、出産・育児を支える人的ネットワークだけでなく、「あの世」や「異界」を視野にいられたコスモロジーのなかで「いのち」を考え直す視点、「親」になる契機としての通過儀礼や躰けのコツなどに注目した理由は、まさにこの点にある。

4. 研究成果

初年度から3つのサブテーマに従って、各自がフィールドワークを行い、途中経過を研究会で発表し、お互いに理解を深めた。また2年目の2013年2月には、日本の出産環境を理解するうえで欠かせない産小屋の調査を福井県小浜・敦賀で実施した。

また、以下のような研究会を3年間にわたり天理大学で定期的に開催した。最終年度の2013年10月には、研究成果発表のシンポジウム「出産の近現代を振り返り、未来へつなぐ」を開催し、先述した通り、シンポジウムの成果を基に『出産の民俗学・文化人類学』として、科研終了後の2014年5月に勉強出版より刊行した。

本科研の研究成果については、『出産の民俗学・文化人類学』にて明らかにした通りであるが、とくに以下の点を強調しておきたい。

出産・育児の研究に取り組む場合、これまで民俗学、文化人類学が蓄積してきた各地の豊富な報告書を用いて、現状を相対化するこ

とができたという点。

また、モノや道具、身体技法などの活字化されない資料を有効に活用できた点。たとえば本書の総合討論で示された、子どもをあやす方法として伝承されてきた、身体を使った多様な場面転換の方法などは、子どもと親の関わり方や躰けの変化を見る際に重要である。

また、妊娠・出産とは、見方を変えれば、女性が社会的に庇護を必要とする弱い立場に置かれた状況と言える。それゆえ妊娠・出産に注目することによって、そこに凝縮された、弱者に対する現代社会の矛盾や歪みを浮かび上がらせることができると言える。したがって本研究は、出産・育児の研究ではあるが、現代社会を批判的に検討し、「いのち」の捉え方に再考を迫る、より大きな研究テーマとして、今後発展させることができると考える。

以下、3年間に天理大学にて行った研究会を列挙する。

* 第1回研究会(2011年5月21日)
研究の目的と三年間の研究の進め方について話し合う。

* 第2回研究会(2011年11月26日)
研究発表 板橋春夫「産屋習俗の終焉と儀礼変化の諸相 敦賀・若狭の産小屋と香川県伊吹島のデーベヤ調査から」
研究発表 安井眞奈美「出産環境の変遷 奈良県吉野郡十津川村を事例に」

* 第3回研究会(2012年3月3日)
研究発表 ミケーラ・ケリー「世代からみる家族観と子育ての変遷 岩手県一戸町の事例から」
研究発表 つる理恵子「出産・子育て環境の概況について 長崎県壱岐島の事例を中心に」

* 第4回研究会(2012年6月4日)
研究発表 鈴木由利子「中絶と水子供養 子育てのいのちの地蔵尊建立をめぐる」
研究発表 飯島吉晴「胞衣と産婆 - 畏怖と賤視」

* 第5回研究会(2012年11月18日)
研究発表 松岡悦子「出産が unhappy な体験となる時」
研究発表 安井眞奈美「鬱にならない産後の過ごし方 母系社会パラオの事例より」

* 第6回研究会(2013年2月15日~2月17日) 福井県小浜・敦賀半島の産小屋調査旅行。後日、調査内容を「敦賀の産小屋調査報告」として冊子作成。

* 第7回研究会(2013年5月27日)

研究発表 ドゥクロ・ガランス「先祖から名前をもらうこと」

研究発表 濱千代早由美「胎盤食の変容」

* 第8回研究会(2013年9月14日)
研究発表 中本剛二「外国人市民の出産・育児 医療サポートボランティアの活動から」

* 第9回研究会 研究成果発表シンポジウム(2013年10月19日~20日)「出産の近現代を振り返り、未来へつなぐ」科研関係者全員発表、波平恵美子の総括、参加者全員によるディスカッション。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計16件)

(1)安井眞奈美「出産・育児 日本民俗学の研究動向(2009-2011)」『日本民俗学』277、2014年、査読無、pp.26-32

(2)飯島吉晴「産育儀礼と贈答 『進物便覧』を中心に」『古事 天理大学考古学・民俗学研究室紀要』18、2014、査読無、pp.23-31

(3)飯島吉晴「若狭の産小屋調査覚書」『天理大学 人権問題研究室紀要』17、2014年、査読無、pp.33-41

(4)岩本通弥「日本民俗学の研究動向(2009-2011)総論」『日本民俗学』277、2014、査読無、pp.6-14

(5)飯島吉晴「産育儀礼と性的逆転の民俗学的意味」『日本医事新報』4634、2013、査読無、pp.64-65

(6)飯島吉晴「賭博と占い」『古事 天理大学考古学・民俗学研究室紀要』17、2013、査読無、pp.72-79

(7)松岡悦子「災害時におけるリプロダクションとジェンダー」『年報 女性史学』23、2013、査読無、pp.50-55

(8)つる理恵子「民俗事象の身体化 岡山県高梁市備中町平川地区の事例」『岡山民俗』234、2013、査読有、pp.30-44

(9)つる理恵子「アキナイ再考 「現在」と「フェミニズムの視点」から」『女性と経験』38、2013、査読無、pp.14-26

(10)安井眞奈美他、本科研メンバー「敦賀の産小屋調査報告」『敦賀市白木地区での聞き取り』、2013、査読無、pp.1-30

- (11)安井眞奈美「変わりゆく母系社会・パラオの子育て 助け合いへの意識の変化」『子育て支援と心理臨床』6、2012、査読無、pp.39-44
- (12)飯島吉晴「産婆 畏怖と賤視」『天理大学 人権問題研究室ニュース』16、2012、査読無、pp.4-5
- (13)鈴木由利子「清源寺『子育ていのちの地蔵尊』と水子供養」『東北学院大学東北文化研究所紀要』44、2012、査読無、pp.53-68
- (14)つる理恵子「ムラの生活を変えたO.Kおばあさん 農家の嫁姑関係の変容」『山陰民俗研究会』17、2012、査読無、pp.53-67
- (15)岩本通弥「オーラルヒストリーと「語り」のアーカイブ化に向けて 文化人類学・社会学・歴史学との対話」『福武学術文化振興財団 2009(H21)年度歴史学助成報告書』2011、査読無、pp.1-2
(http://www.fukutake.or.jp/science/assist/report/09/pdf/21rg1_iwamoto.pdf)
- (16)つる理恵子「第6章産育 お産の近代化と子育ての社会化」『奈義町滝本の民俗岡山県奈義町滝本民俗調査報告書』2011、査読無、pp.109-140
- 〔学会発表〕(計22件)
- (1)安井眞奈美「出産環境の変容 奈良県吉野郡十津川村のフィールドワークより」、2013.12.14、奈良人権部落解放研究所(招待講演)
- (2)板橋春夫「月小屋・産屋をめぐる民俗思想 ウブスナ・差別・共助の視点から」長野県民俗の会総会、2013.11.23、松本市立博物館
- (3)安井眞奈美他、本科研メンバー「出産の近現代を振り返り、未来へつなぐ」本科研成果発表シンポジウム、2013.10.19-20、天理大学
- (4)板橋春夫「近代化の中の産屋習俗 山形県西置賜郡小国町大宮の産屋の事例から」日本民俗学会第65回年会、2013.10.13、新潟大学
- (5)つる理恵子「瀬川清子の研究における実践性」日本民俗学会第65回年会、2013.10.13、新潟大学
- (6)松岡悦子「社会の近代化、医療の高度化とリプロダクション 今、アジアの女性たちはどのように産んでいるのか」第33回

- 家族関係学セミナー公開シンポジウム
2013.10.5、奈良大学
- (7)松岡悦子「What makes normal birth difficult?」In 8th Normal Birth Conference、2013.6.6、Grange Over Sands Hotel、UK
- (8)岩本通弥「異人から 内なる異人 へ」共同研究「現代民俗研究方法論の学際的研究」2013.3.30、国際日本文化研究センター
- (9)岩本通弥「マスオさん現象から 2.5 世帯住宅へ」共同研究「人の移動とその動態に関する民俗学的研究」2013.3.22、国立歴史民俗博物館
- (10)安井眞奈美「「奈良県風俗誌」を読む—明治・大正初期の出産・育児」平成24年度奈良県図書館協会地域資料研究会公開講座「地域資料と地域文化への誘い」2013.01.27、奈良県立図書館(招待講演)
- (11)松岡悦子「Modernization of Reproduction in Asia with a Comparative Perspective」Joint Seminar on Reproduction in Asia: Impacts of Modernization on Local Culture and Women's Health、2013.01.12-13、Gadjah Mada University、Yogyakarta.
- (12)安井眞奈美「大和地方の出産文化—「奈良県風俗誌」より」第19回例会 助産婦と語る会 なら大和路へ テーマ「伝え・繋がり そしてはぐくむ助産の心」2012.11.23、奈良・宇陀温泉郷 保養センター 美榛苑(招待講演)
- (13)板橋春夫「産屋民俗再考 敦賀・若狭の産小屋調査から」日本民俗学会第64回年会、2012.10.7、東京学芸大学
- (14)岩本通弥「文明開化と民衆生活 家族と親子の日常化過程」明治維新研究会、2012.9.21、コンソーシアム京都
- (15)安井眞奈美「妖怪・怪異伝承から読み解く日本人の身体観」日本スポーツ人類学会第13回大会、2012.03.24、天理大学体育学部(招待講演)
- (16)松岡悦子「Comments to the Panel "Comparative Studies on Family Planning in late Twentieth-Century Asia : Politics of Reproductive Health and Rights。」Association for Asian Studies 2012 Annual Conference、2012.03.18、Toronto、Canada

- (17)板橋春夫「いのちの近代 トリアゲバアサンから助産師へ」国立歴史民俗博物館第歴 78 回歴博フォーラム、2011.10.29、早稲田大学小野記念講堂
- (18)鈴木由利子「子どもの誕生にみる『選択される命』」国立歴史民俗博物館第歴 78 回歴博フォーラム、2011.10.29、早稲田大学小野記念講堂
- (19)岩本通弥「都市民俗学の可能性-日本民俗学 30 年余の経験をふまえて」第 1 届都市社会論壇、城市化と都市生活国際学術会議、2011.10.21、中国上海・華東師範大学(招待講演)
- (20)松岡悦子「Is Medicalization of Childbirth Good for Women's Health?」The Sixth Asia Pacific Conference on Reproductive and Sexual Health and Rights、2011.10.20、Yogyakarta, Indonesia
- (21)つる理恵子「ムラにおける女どうしの絆 血縁+地縁から選択縁へ」日本民俗学会第 63 回大会、2011.10.02、滋賀県立大学
- (22)松岡悦子「生き残るための家族計画 インドネシア・カリマンタン島の事例より」第 21 回日本家族社会学会、2011.09.11、甲南大学
- 〔図書〕(計 11 件)
- (1)安井眞奈美編著、勉誠出版『出産の民俗学・文化人類学』(本科研の成果報告書) 2014、349
- (2)鈴木則子編、思文閣『歴史における周縁と共生 女性・穢れ・衛生』、2014、359(濱千代早由美執筆 pp.139-160)
- (3)安井眞奈美、昭和堂『出産環境の民俗学 <第三次お産革命>にむけて』、2013、271
- (4)木村涼子・伊田久美子・熊安貴美江編『よくわかるジェンダー・スタディーズ 人文社会科学から自然科学まで』、2013、242(松岡悦子執筆 pp.36-37)
- (5)塩津三治著、板橋春夫翻刻、『敦賀半島の産小屋・月小屋』、2013、84
- (6)国立歴史民俗博物館 + 山田慎也編、岩田書院、『近代化の中の誕生と死』、2013、246(板橋春夫執筆 pp.17-67、鈴木由利子執筆 pp.69-97)
- (7)加藤尚美・林陽子・平山イソラ編、日本助産師会出版『基礎助産学』1、2013、333(松

岡悦子執筆 pp.227-239)

- (8)須藤健一編、風響社『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』、2012、342(安井眞奈美執筆 pp.213 - 233)
- (9)山泰幸・足立重和編、ミネルヴァ書房、『現代文化のフィールドワーク入門』、2012、273 (安井眞奈美執筆 pp.21-37)
- (10)安井眞奈美編著、法蔵館『出産・育児の近代 「奈良県風俗誌を読む」』、2011、523(飯島吉晴執筆 pp.50-58,105-116,169-172、柿本雅美執筆 pp.132-148)
- (11)松岡悦子・小浜正子編、勉誠出版『世界の出産 儀礼から先端医療まで』2011、336(安井眞奈美執筆 pp.259-266)

〔その他〕
本科研に関するホームページ等なし。

6 . 研究組織

- (1)研究代表者
安井眞奈美 (YASUI, Manami)
天理大学・文学部・教授
研究者番号：40309513
- (2)研究分担者
飯島 吉晴 (IJIMA, Yoshiharu)
天理大学・文学部・教授
研究者番号：30184344
- 岩本 通弥 (IWAMOTO, Michiya)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：60192506
- つる 理恵子 (TSURU, Rieko)
吉備国際大学・社会科学部・准教授
研究者番号：20227474
- 松岡 悦子 (MATSUOKA, Etsuko)
奈良女子大学・教授
研究者番号：10183948
- (3)連携研究者
板橋春夫 (ITABASHI, Haruo)
國學院大學等・非常勤講師
研究者番号 90620089
- 柿本 雅美 (KAKIMOTO, Masami)
佛教大学宗教文化ミュージアム・ポストドクター
研究者番号：00638801

鈴木由利子(SUZUKI, Yuriko)
宮城学院女子大学・非常勤講師
研究者番号：30599668

波平恵美子(NAMIHIRA, Emiko)
お茶の水女子大学・文教育学部・名誉教授
研究者番号：00109216

濱千代早由美(HAMACHIYO, Sayumi)
帝塚山大学等・非常勤講師
研究者番号：60599520